

がんの痛みと痛み止めについて No. 2

麻薬性鎮痛薬

はじめに

痛みを取り除く治療により栄養や睡眠が十分にとれる状態を保つことは、がんを治すための治療と同じ、もしくはそれ以上に重要であることについては、前号でもお伝えしたところです。

その中で中心的な役割を果たしているものとして「麻薬性鎮痛薬」と呼ばれるお薬があります。今回はこの「麻薬性鎮痛薬」について少し詳しくご紹介したいと思います。

麻薬性鎮痛薬とは

がんの痛みに優れた効果を発揮する医療用麻薬のことで、日本では現在、主にモルヒネ、オキシコドン、フェンタニルの3種類の成分が使用されています。

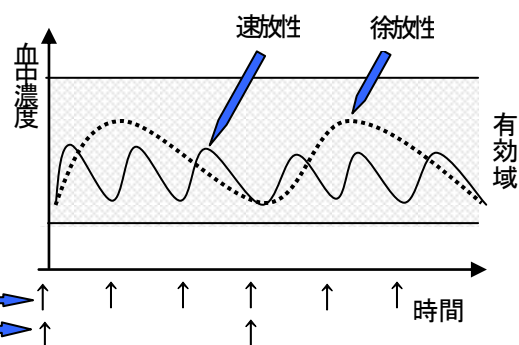
剤形のほうも、内服薬(速放性・徐放性)、坐薬、貼り薬、注射薬と色々あります。

これらは、症状と効果をみながら選択し、必要に応じて切り替えも行われます。

＜日本での使用可否＞ ○印：可 ×印：否

		モルヒネ	オキシコドン	フェンタニル
内服薬	速放性	○	○	×
	徐放性	○	○	×
坐薬		○	×	×
貼り薬		×	×	○
注射薬		○	○(配合剤)	○

速放性と徐放性の違い(反復服用時)



＜各剤形の特徴＞

内服薬(速放性)◎ 効き始めるまでの時間が最も速いお薬です。突発的な痛みなどに使用します。

*オプソ内服液、オキノーム散など

内服薬(徐放性)◎ 効果が長続きするように工夫されたお薬で、1日2回程度の服用で効果が持続します。 *MSコンチン錠、オキシコンチン錠など

坐薬◎ ◎ ◎ ◎ 直腸から速やかに吸収されて効くお薬です。 *アンペック坐剤

貼り薬◎ ◎ ◎ ◎ 皮膚からゆっくり吸収されるように工夫されたお薬で、3日毎の貼り替えで効果が持続します。量の調節に時間がかかるので、他のお薬からの切り替えで使用します。 *デュロテップMTパッチ

注射薬◎ ◎ ◎ ◎ 持続皮下注入などで使用します。携帯用ポンプを使用すればご自宅でも可能です。 *塩酸モルヒネ注、フェンタニル注など

痛み治療の進め方は

❀ 目 標 ❀

- ❶ 夜間ぐっすり眠れる
- ❷ 静かにしていれば痛くない
- ❸ 歩いたりして身体を動かしても痛くない



❀ 大切なこと ❀

痛みは我慢しないで伝えてください

「どこが、どのように、どのくらい、どんな時痛むのか」という説明は、治療を進めていく上でのご本人のみが知る重要な情報です。記録しておくことで医療者に伝えやすくなります。

痛み止めのお薬は量と時間を守って使用してください

効果が途切れないよう一定の間隔で使用します。突発的な痛みがあればレスキューで対応します。痛みを取り除くのに必要なお薬の量には個人差が大きく、病気の進行状況とは無関係ですので、十分な量をきっちり使用することが大切です。

また、麻薬性鎮痛薬の効きにくい痛みには、他の鎮痛薬や治療法を組み合わせることで対応します。

臨時追加投与

副作用とその対策は



麻薬性鎮痛薬には次に示すような副作用が知られていますので、一般的に副作用予防薬と一緒に使用を開始します。

[便秘]

腸の動きを鈍くする作用があるため、便秘はほとんどの人に起こります。継続的に下剤を使用することで予防できますので心配は不要です。

[吐き気]

吐き気は3～5割の人に起こります。吐き気止めで予防します。2週間くらいで治まりますので、予防薬は減量または中止できる場合が多いです。

[眠気]

使い始めに眠気を感じるがありますが、数日で治まります。今までの睡眠不足を解消していると考えられますが、過度の眠気を感じる場合は、主治医にご相談ください。

その他、ふらふらする感じ、めまい、頭の中が混乱する、尿が出にくい、かゆみなどの症状が現れることがあります。そのような場合は主治医にご相談ください。

なお、麻薬性鎮痛薬の副作用は、成分や剤形を変えることで改善する場合があります。

麻薬中毒になる？ 寿命が縮まる??

それは **誤解!** です

痛みの治療に必要な量を使用する限り依存性や耐性に関する心配は不要で、中毒になることはないことが科学的に解明されています。

他の治療によって痛みが軽くなれば、減量や中止が可能です。

また、寿命が縮まったりすることはありません。

